

■「国連」という錯覚 内海 善雄〔著〕

各国の思惑に対抗していくスリル

国連というと、読者の多くは、国連改革や安保理をめぐる駆け引きを連想するに違いない。そうであれば、本書の題名はやや誤解を呼ぶ。

これは、国連傘下の専門機関である国際電気通信連合（ITU）の事務総局長を8年間務めた日本人の活動記録である。題名の「錯覚」とは、国連の専門機関ともなれば、世界をよくするための組織と思いきや、意外にも、各国の思惑や上級職員の利害で動くことが多いのが現実であることを指している。

確かに、専門家集団のトツプたちを選ぶのに、適性そっちのけで自国の権益確保をめざして投票する各国、横やりばかり入れる外交官、堂々と正論を吐きながら、実は自分を売り込むのに夢中の専門家など、幻滅に値することはたくさんある。国連の専門機関は有益な活動をしているだけに、一皮めくった現実には驚きを禁じえない。

その一方で本書を、そうした障害や国際的な官僚組織の厳しい現実と戦いながら、日本風の「皆のために良かれ」

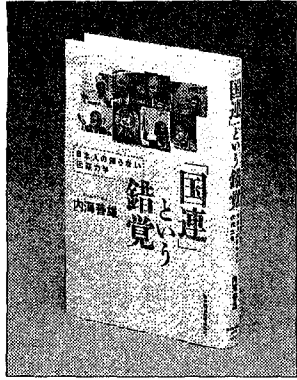
の考え方を貫こうとした物語として読むと、ずいぶん頑張れるものだという感想を持つ。

むしろ、各国の身勝手な論理や旧来の悪弊に対抗したりの裏をかいたり、組織内外の友人たちと助け合ったりして、目標を達成するさまはスリルがあり、実に面白い。

ITUは国連機関としては地味で知名度は低いですが、世界の電話網を管理する重要な組織である。

ところが、電話は各国で国家が独占的に経営してきた通信手段であり、ITUも世界で最初に設立された古めかしい国連機関であり、インターネット時代に適合していない。その改革を著者がめざしたのは、インターネットが弱小の途上国の発展に役立つからである。

そのため、情報社会サミットまでも開催するに至った。特に、2005年のチュニジアでの首脳会議には、インターネットの運営権をめぐる討議がなされた点など、多くの実りがあったという。その舞台裏の話も、刺激的なエピソードに満ちている。



日本経済新聞出版
社・2100円/うち
み・よしお 42年生ま
れ。元ITU事務総局
長。早大客員教授。